

記者発表資料

平成19年8月の酷暑では、約1.2億 m^3 (矢木沢ダム1個分)を補給！

- ・ダム等水資源開発施設については、きめ細かな水運用を行っていく。
- ・必要に応じて、節水協力の要請と取水制限等の機動的な対応を行っていく。

(事務局：関東地方整備局河川部)

発表記者クラブ

埼玉県政記者クラブ、竹芝記者クラブ、横浜海事記者クラブ
神奈川建設記者会、東京都庁記者クラブ、千葉県政記者会
茨城県政記者クラブ、栃木県政記者クラブ、刀水クラブ

問		合		わ		せ		先	
国土交通省	関東地方整備局	河川部							
〒330-9724	埼玉県さいたま市中央区新都心2-1			水 政 調 整 官	塚 本	(内線)	3	5	1 5
	さいたま新都心合同庁舎 2 号館			水 政 課 長	小 島	(内線)	3	5	5 1
電話 (代	表) 0 4 8 - 6 0 1 - 3 1 5 1			河 川 環 境 課 長	富 岡	(内線)	3	6	5 1
	(水政課夜間直通) 0 4 8 - 6 0 0 - 1 3 3 4			河川環境課長補佐	林	(内線)	3	6	5 2
	(河川環境課夜間直通) 0 4 8 - 6 0 0 - 1 3 3 6								

平成19年度第2回利根川水系渇水対策連絡協議会幹事会 (秋季定例会) の開催結果について (概要)

1. ダムの貯水状況・降雨状況と今後の見通し

首都圏の水ガメである利根川上流8ダムは、暖冬による少雨・少雪により春先に貯水量が回復せず、例年満水となる5月15日から6月10日迄の期間としては、8ダム体制となった平成4年以降で最も少ない貯水量となりました。

このため北千葉導水路等の下流施設の活用や鬼怒川上流ダム群と連携した運用により、利根川上流8ダムの貯水量の温存を図りました。

その後、7月は台風4号や梅雨前線により平年を大きく上回る貯水量となりましたが、8月は酷暑と平野部での極端な少雨により、矢木沢ダム1個相当の約1億2千万m³を補給しました。9月以降は、9月6日の台風9号の降雨等もあり順調に貯留を続けている状況です。

10月31日時点の利根川上流8ダムと鬼怒川上流3ダムの貯水量は、表のとおりであり、平年を上回っています。

現在、一部のダムでは、ダム運用上重要な工事を実施するため、貯水量が制限されますが、来年の融雪期までには、工事を完了させる予定です。

	貯水量 (貯水率)	平年比	備 考
利根川上流8ダム (10月31日9時)	3億4,003万m ³ (74%)	107%	平年を上回る
鬼怒川上流3ダム (10月31日0時)	1億0,540万m ³ (58%)	115%	平年を上回る

現在までの利根川上流域の降雨状況は、表のとおりであり、1月から8月の累加降水量は、平年を下回りましたが、9月から10月は台風9号や台風20号の影響もあり、平年を上回っています。

	1月～8月の累加 降水量 (平年比)	9月～10月の累 加降水量 (平年比)	備 考
利根川栗橋上流域 平均降水量	943mm (87%)	517mm (155%)	1月から8月の累加降水量は、昭和23年以降60年間で12番目に少ない降水量
鬼怒川佐貫上流域 平均降水量	819mm (75%)	612mm (147%)	1月から8月の累加降水量は、昭和47年以降36年間で3番目に少ない降水量

今後、冬期は降水量が少なくなることから、例年12月よりダムに貯留した水を下流河川に補給しており、ダムの貯水量の低下が予想されます。

2. 今後の対策

- ①利根川上流ダム群及び下流部の水資源開発施設においては、今後の降雨状況及び下流部の水利用を踏まえたきめ細かい運用を行い、ダム貯水量の確保に努め、冬期及び来春の水需要に備えます。
- ②利根川渇水対策連絡協議会としては、現在のダム等の水供給能力が、首都圏の水需要の大きさに対して十分とはいえない状況にかんがみ、適宜幅広い広報活動を通じて節水の協力を要請していきます。また、取水制限等の調整が必要になった場合には、機動的に行っていきます。

※ ダムの貯水量及び貯水率の情報を、電話応答サービスにより、リアルタイムに提供しています。どうぞご利用下さい。

- ・利根川上流8ダム 電話番号 027-255-5692
- 五十里ダム 電話番号 0288-78-0440
- ・鬼怒川上流3ダム 川治ダム 電話番号 0288-78-0908
- 川俣ダム 電話番号 0288-96-0288

※ ホームページでもダムの情報をお届けしています。

<http://www.ktr.mlit.go.jp/> (首都圏の水資源情報 他)

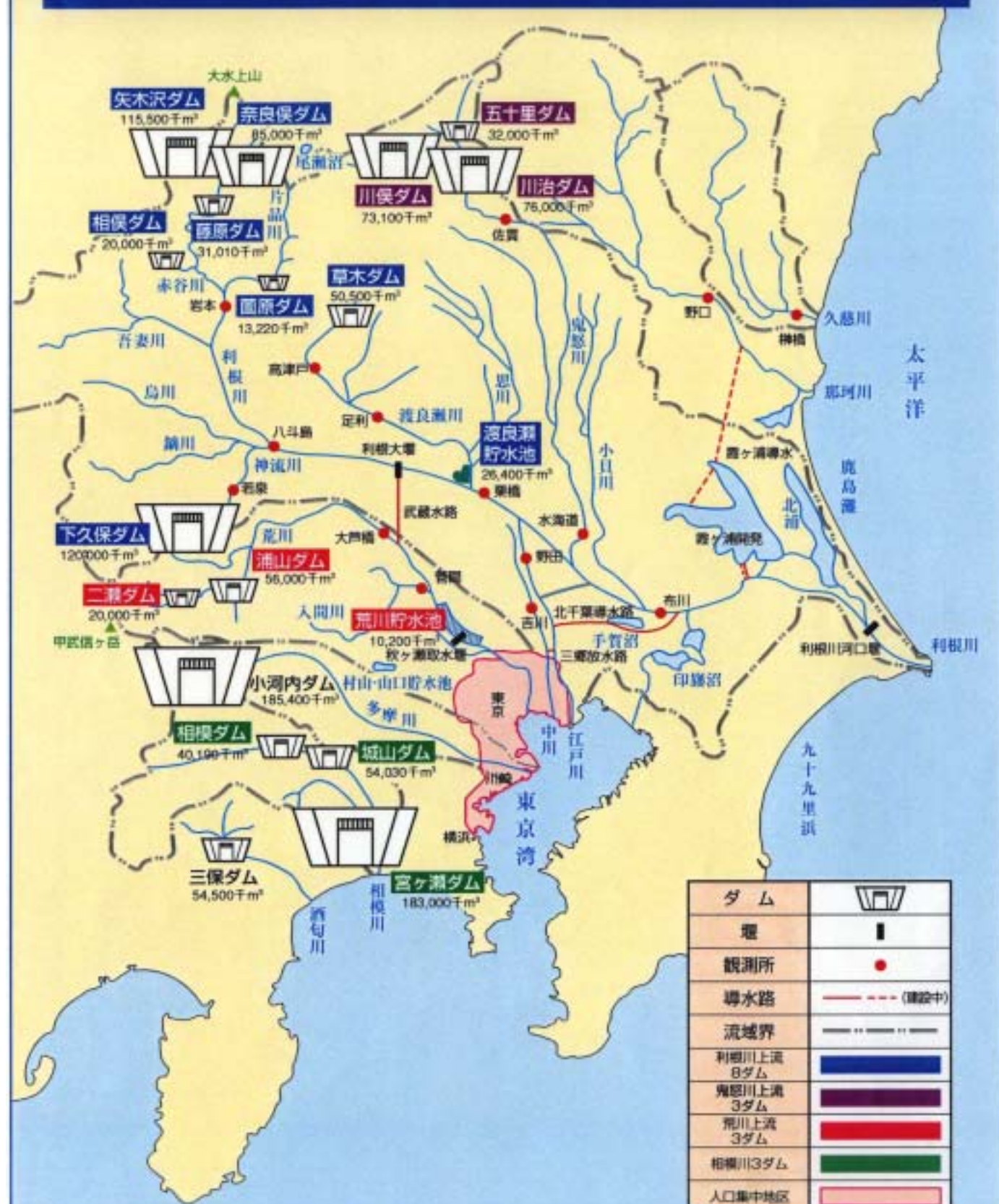
利根川水系渇水対策連絡協議会委員

会 長	国土交通省関東地方整備局長
委 員	国土交通省関東地方整備局副局長
〃	国土交通省関東地方整備局河川部長
〃	経済産業省関東経済産業局地域経済部長
〃	農林水産省関東農政局農村計画部長
〃	東京都都市整備局都市づくり政策部長
〃	〃 建設局河川部長
〃	〃 水道局総務部長
〃	千葉県県土整備部長
〃	〃 総合企画部長
〃	埼玉県県土整備部長
〃	〃 総合政策部長
〃	茨城県土木部長
〃	〃 企画部長
〃	群馬県県土整備部長
〃	〃 企画部長
〃	栃木県県土整備部長
〃	独立行政法人水資源機構理事（管理担当）
〃	〃 管理担当部長

利根川水系渇水対策連絡協議会幹事

幹事長	国土交通省関東地方整備局河川部広域水管理官
幹 事	国土交通省関東地方整備局河川部河川情報管理官
〃	国土交通省関東地方整備局河川部水政課長
〃	〃 〃 〃 河川計画課長
〃	〃 〃 〃 河川環境課長
〃	〃 〃 〃 河川管理課長
〃	経済産業省関東経済産業局地域経済部地域経済課産業立地室長
〃	農林水産省関東農政局農村計画部農村振興課長
〃	国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長
〃	〃 利根川下流河川事務所長
〃	〃 江戸川河川事務所長
〃	〃 霞ヶ浦河川事務所長
〃	〃 渡良瀬川河川事務所長
〃	〃 下館河川事務所長
〃	〃 高崎河川国道事務所長
〃	〃 利根川ダム統合管理事務所長
〃	〃 鬼怒川ダム統合管理事務所長
〃	〃 荒川上流河川事務所長
〃	〃 京浜河川事務所長
〃	東京都建設局河川部計画課長
〃	〃 〃 都市整備局都市づくり政策部副参事（水資源・建設副産物担当）
〃	〃 水道局総務部施設計画課長
〃	千葉県県土整備部河川環境課長
〃	〃 総合企画部水政課長
〃	埼玉県県土整備部河川砂防課長
〃	〃 総合政策部土地水政策課長
〃	茨城県土木部河川課長
〃	〃 企画部水・土地計画課長
〃	群馬県県土整備部河川課長
〃	〃 企画部土地・水対策室長
〃	栃木県県土整備部河川課長
〃	独立行政法人水資源機構管理事業部管理企画課長
〃	〃 利根導水総合管理所長

関東地方の主要な河川と水資源開発施設



注：ダム名下の添え書きは貯水容量

利根川上流ダム群等の現況と今後の対策について

平成19年11月1日

関 東 地 方 整 備 局

1. 利根川上流ダム群等の現況

1) 利根川水系

(1) 降水量

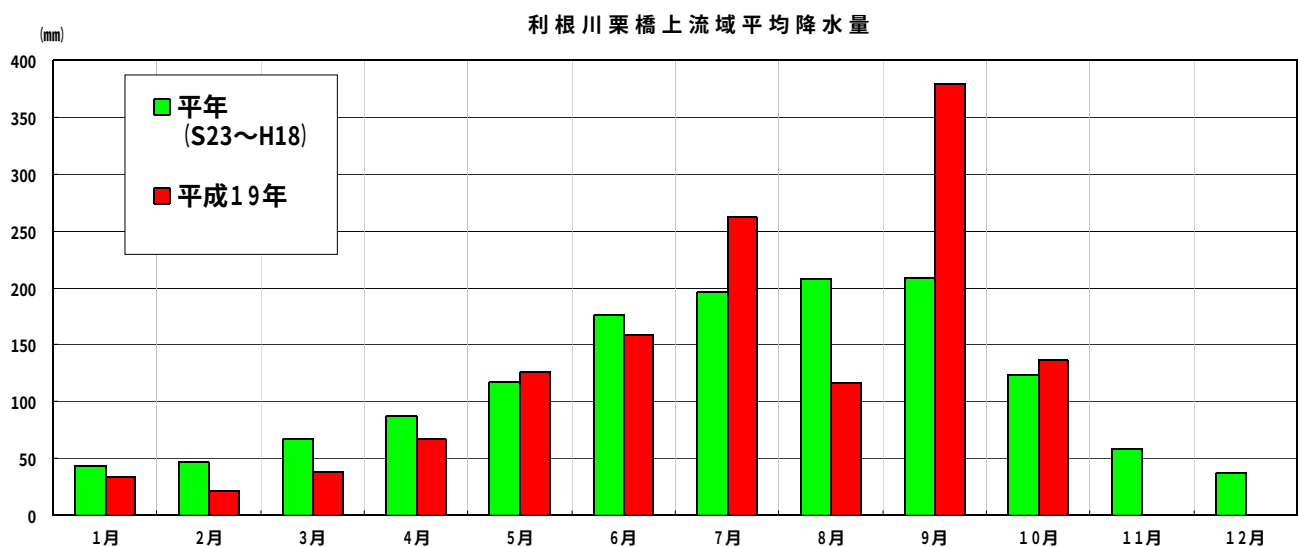
平成19年の利根川栗橋上流域平均降水量は、1月から6月の累加降水量で、445mm（平年比83%）となり、昭和23年以降の60年間で10番目に少ない降水量となりました。

7月は台風4号と梅雨前線の降雨の影響により262mm（平年比134%）となりましたが、8月は梅雨明け後の酷暑と少雨により116mm（平年比56%）となり、昭和23年以降の60年間で8番目に少ない降水量となりました。

9月は台風9号と低気圧による降雨の影響により380mm（平年比182%）となり、昭和23年以降の60年間で3番目に多い降水量となりました。

10月は26日までは少雨傾向でしたが、台風20号の影響により30日までに137mm（平年比110%）となっています。（図－1、表－1参照）

図－1



表－1 利根川栗橋上流域平均降水量

	単位(mm)													
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	摘 要
昭和62年	22	33	62	14	89	91	204	186	252	73	39	26	1,091	利根川夏渇水
平成2年	31	66	71	119	58	74	118	193	326	143	183	31	1,413	〃
平成6年	27	50	52	23	139	107	104	153	346	87	26	29	1,143	〃
平成8年	26	36	70	48	98	117	155	78	217	80	55	23	1,003	利根川冬夏渇水
平成9年	33	33	59	74	179	173	170	167	206	14	94	20	1,222	利根川冬渇水
平成13年	79	35	75	23	136	176	116	366	321	173	46	23	1,569	利根川夏渇水
平年 (S23-H18)	44	47	67	88	117	176	196	208	209	124	59	37	1,372	
平成19年	34	21	38	67	126	159	262	116	380	137			1,340	
平年比(%)	77	45	57	76	108	90	134	56	182	110			98	

※平成19年10月30日まで

※. 利根川取水制限実施月（一時緩和含む）

※. 栗橋上流域面積 8,588km²

(2) 利根川上流ダム群の貯水状況

平成19年春期の利根川上流8ダムは、暖冬による少雨・少雪の影響から融雪出水が少なく、このため北千葉導水路等下流施設の活用や鬼怒川上流ダム群と連携した運用により、利根川上流8ダムの貯水量の温存に努めましたが、貯水量は回復せず、例年満水となる5月15日から6月10日迄の期間としては、8ダム体制となった平成4年以降で最も少ない貯水量となりました。

その後、断続的な降雨等もあり貯留補給を繰り返しましたが、夏期制限水位に移行した7月1日には貯水量3億2,821万 m^3 、貯水率96%、平年比103%となりました。

7月14日に関東地方に接近した台風4号や梅雨前線の降雨の影響により8月1日には満水となりましたが、梅雨明け後の酷暑と少雨の影響により再び補給となり、矢木沢ダム1個相当の約1億2,000万 m^3 を補給し、9月5日には貯水量2億2,761万 m^3 、貯水率66%まで低下しました。

9月6日には、関東地方を直撃した台風9号の降雨の影響に伴い貯水量は回復し、非洪水期に移行した10月に入ってから、台風20号の降雨等により回復傾向にあります。

10月31日9時現在の貯水量は、3億4,003万 m^3 、貯水率74%、平年比107%と平年を上回っています。(表-2、図-2参照)

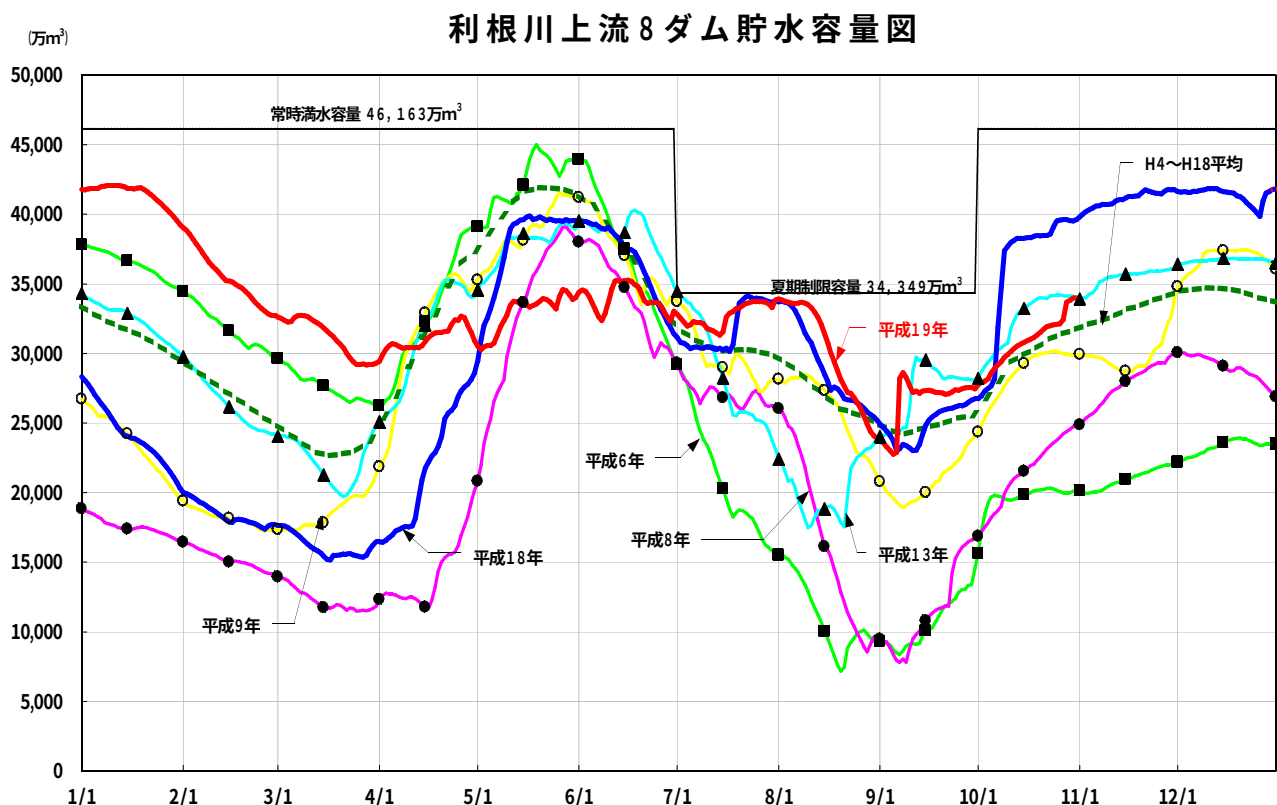
表-2 利根川上流8ダム貯水量

平成19年10月31日9時現在

ダム名	有効容量 (万 m^3)	貯水量 (万 m^3)	貯水率 (%)	前日補給量 (万 m^3 /日)
矢木沢ダム	11,550	7,872	68	-80
奈良俣ダム	8,500	7,147	84	-30
藤原ダム	3,101	867	28	29
相俣ダム	2,000	953	48	39
藺原ダム	1,322	1,207	91	24
下久保ダム	12,000	8,525	71	2
草木ダム	5,050	4,929	98	-5
渡良瀬貯水池	2,640	2,503	95	0
8ダム合計	46,163	34,003	74	-21

1. 有効容量は、常時満水容量。
2. 貯水率は、常時満水容量に対する貯水量の割合。
3. 前日補給量とは、前日の貯水量と本日の貯水量の差。(プラスの場合はダムの集水区域からダムへ流入してくる水より、ダムから放流する量が多い)

図-2



2) 鬼怒川水系

(1) 降水量

平成19年の鬼怒川佐貫上流域平均降水量は、1月から6月の累加降水量で、230mm（平年比70%）となり、昭和47年以降の36年間で3番目に少ない降水量となりました。

7月は台風4号と梅雨前線の降雨の影響により、298mm（平年比133%）となりましたが、8月は梅雨明け後の酷暑と少雨により115mm（平年比41%）となり、昭和47年以降の36年間で6番目に少ない降水量となりました。

9月は台風9号と低気圧に伴う降雨の影響により471mm（平年比173%）となり、昭和47年以降の36年間で4番目に多い降水量となりました。

10月は26日までは少雨傾向でしたが、台風20号の影響により30日までに141mm（平年比99%）となっています。（図-3、表-3参照）

図-3

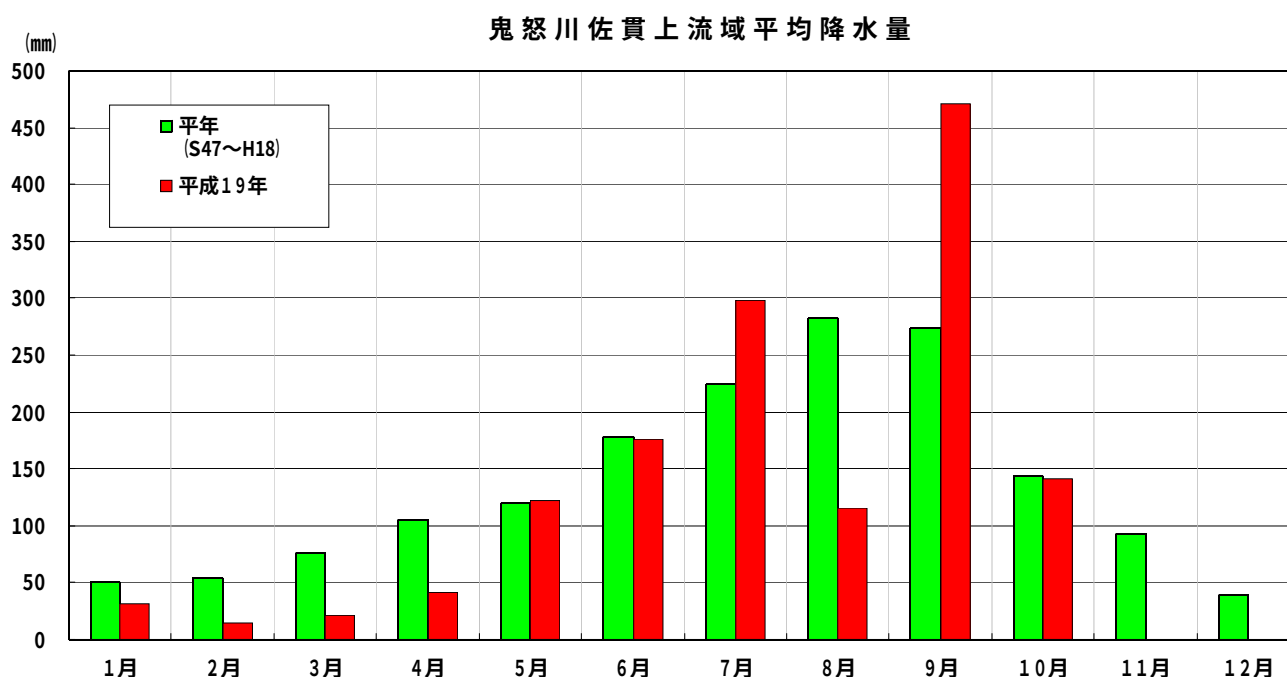


表-3 鬼怒川佐貫上流域平均降水量

	単位(mm)												
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合 計
昭和62年	21	34	127	21	121	134	186	156	321	121	38	21	1,301
平成2年	35	89	79	164	53	111	109	338	394	195	220	66	1,853
平成6年	15	118	77	21	126	103	159	218	551	122	25	48	1,583
平成8年	46	69	79	67	113	103	176	109	211	66	65	36	1,140
平成9年	46	55	74	52	145	272	234	114	274	17	215	27	1,525
平成13年	56	13	34	13	116	185	147	484	610	225	62	35	1,980
平年(S47-H18)	50	54	76	105	120	178	224	282	273	143	93	39	1,637
平成19年	31	15	21	41	122	176	298	115	471	141			1,431
平年比(%)	62	28	28	39	102	99	133	41	173	99			87

※平成19年10月30日まで

※．鬼怒川佐貫上流域面積 940km²

(2) 鬼怒川上流ダム群の貯水状況

平成19年春期の鬼怒川上流3ダムは、前年の年末から過去最高の貯水量となり、その後、平年を上回る貯水量で推移し、4月15日には、貯水量1億7,249万 m^3 、貯水率96%に達しました。

以降、鬼怒川本川の必要量を満足させるための補給や、4月21日から利根川本川へ3 m^3/s の補給を行い、6月7日には1億1,010万 m^3 、貯水率61%、平年比93%となりました。その後、6月7日の低気圧に伴う降雨により平年を上回り、8月は梅雨明け後の少雨、9月は台風9号や低気圧に伴う降雨により、平年を上回る貯水量で推移しました。

平成19年10月31日0時現在の貯水量は、1億540万 m^3 、貯水率58%、平年比115%と平年を上回っています。(表-4、図-4参照)

表-4 鬼怒川上流3ダム貯水量

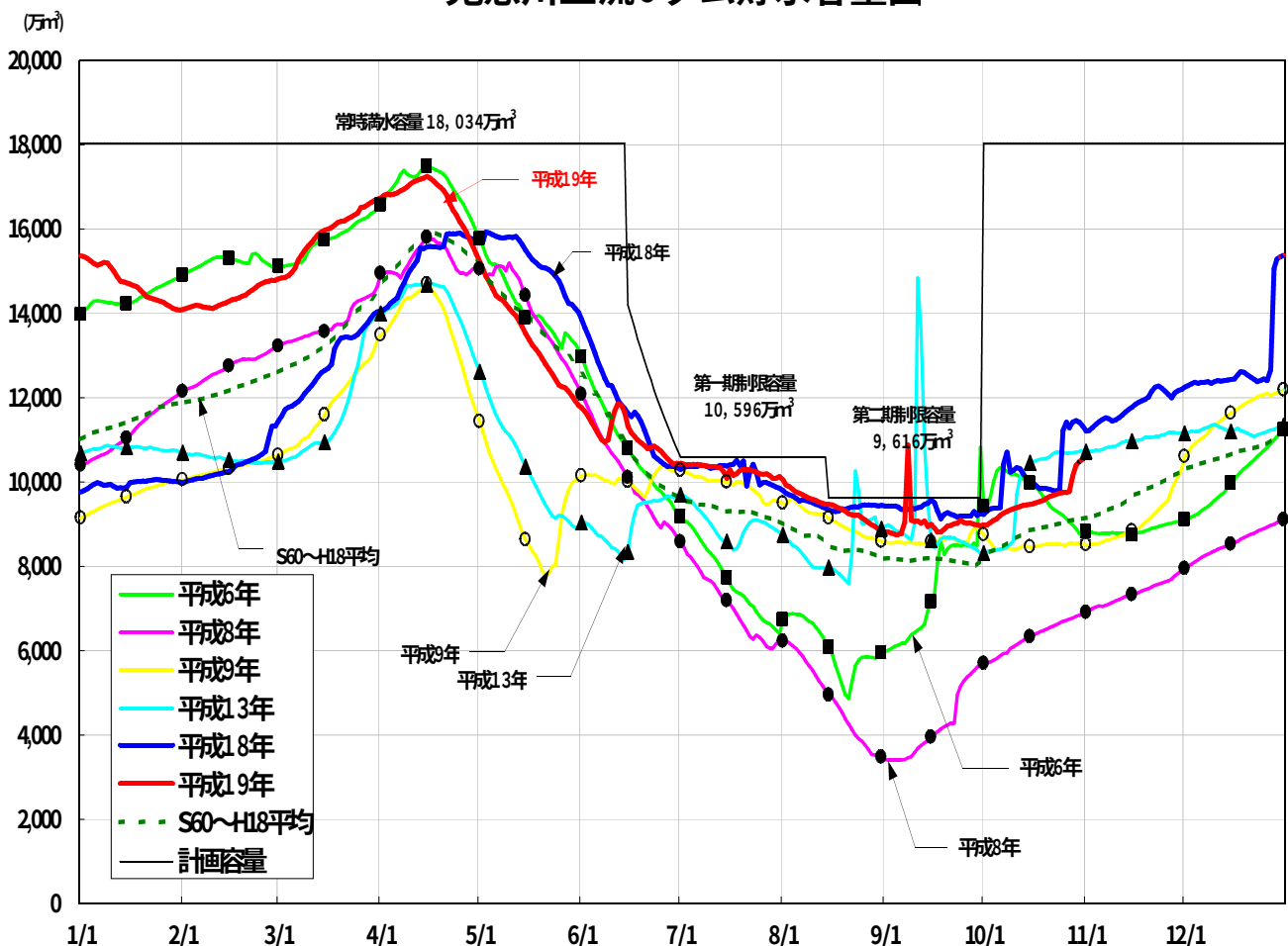
平成19年10月31日0時現在

ダム名	有効容量 (万 m^3)	貯水量 (万 m^3)	貯水率 (%)	前日補給量 (万 $\text{m}^3/\text{日}$)	適 用
五十里ダム	3,123	731	23	-52	
川俣ダム	7,311	5,849	80	0	
川治ダム	7,600	3,960	52	-2	
3ダム合計	18,034	10,540	58	-54	

1. 有効容量は、常時満水容量。
2. 貯水率は、常時満水容量に対する貯水量の割合。
3. 前日補給量とは、前日の貯水量と本日の貯水量の差。(プラスの場合はダムの集水区域からダムへ流入してくる水より、ダムから放流する量が多い)

図-4

鬼怒川上流3ダム貯水容量図



3) 荒川水系

(1) 降水量

平成19年の荒川秋ヶ瀬上流域平均降水量は、1月から6月の累加降水量は、301mm（平年比60%）となり、昭和40年以降の43年間で3番目に少ない降水量となりました。

7月は台風4号と梅雨前線の降雨の影響により310mm（平年比168%）となりましたが、8月は梅雨明け後の酷暑と少雨により57mm（平年比26%）となり、昭和40年以降の43年間で2番目に少ない降水量となりました。

9月は台風9号の影響により502mm（平年比219%）となり、過去最高の降水量となりました。

10月は26日までは少雨傾向で、台風20号の影響により30日までに123mm（平年比85%）となっています。（図-5、表-5参照）

図-5

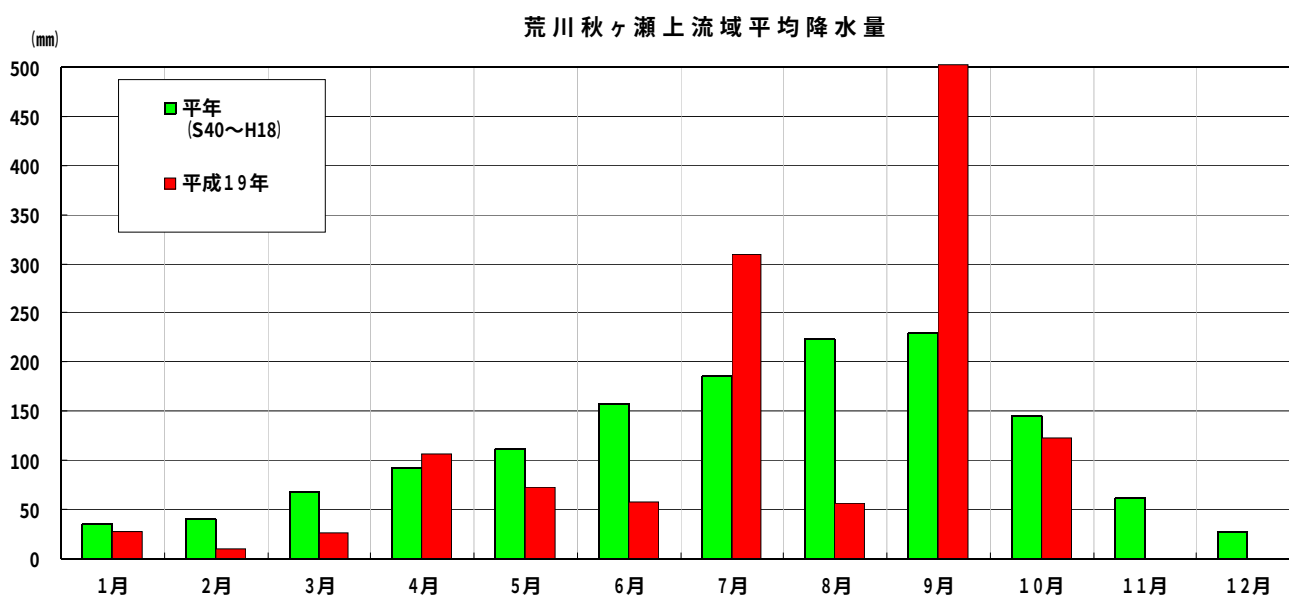


表-5 荒川秋ヶ瀬上流域平均降水量

	単位(mm)												
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合 計
昭和62年	16	29	66	8	66	88	146	103	280	91	46	36	975
平成2年	22	67	83	138	48	55	77	228	473	134	301	31	1,657
平成6年	42	44	64	25	111	103	152	142	344	119	21	24	1,191
平成8年	1	22	55	62	80	47	204	32	314	74	57	17	965
平成9年	21	13	57	70	187	168	148	72	204	7	87	21	1,055
平成13年	98	17	98	30	179	120	69	279	444	247	67	9	1,657
平年(S40-H18)	35	40	68	93	112	158	185	223	229	145	61	28	1,377
平成19年	27	10	26	107	73	58	310	57	502	123			1,293
平年比(%)	77	25	38	115	65	37	168	26	219	85			94

※平成19年10月30日まで

※. 荒川秋ヶ瀬上流域面積 2,021km²

(2) 荒川3ダムの貯水状況

平成19年春期の荒川3ダムは、前年から過去最高の貯水量となり、その後、平年を上回る貯水量で推移し、5月22日には貯水量7,172万 m^3 、貯水率83%に達しました。

以降、荒川本川への必要量を満足させるための補給を行い、7月14日には、貯水量4,686万 m^3 、貯水率88%まで低下しました。その後、7月14日に関東地方に接近した台風4号や梅雨前線の降雨の影響により回復しました。

梅雨明け後は、酷暑と少雨の影響により8月12日から再び補給となり、9月5日には、本格的な統合管理に入った平成12年以降で最も少ない貯水量3,244万 m^3 、貯水率80%まで低下しましたが、9月6日に関東地方を直撃した台風9号の降雨の影響に伴い貯水量は回復しました。

非洪水期に移行した10月に入ってから、再び少雨傾向で大幅な回復が無かったものの、10月27日に関東地方に接近した台風20号の降雨の影響により、貯水量は回復傾向にあります。

10月31日9時現在の貯水量は、5,401万 m^3 、貯水率63%、平年比95%と平年を下回っています。(表-6、図-6参照)

表-6 荒川3ダム貯水量

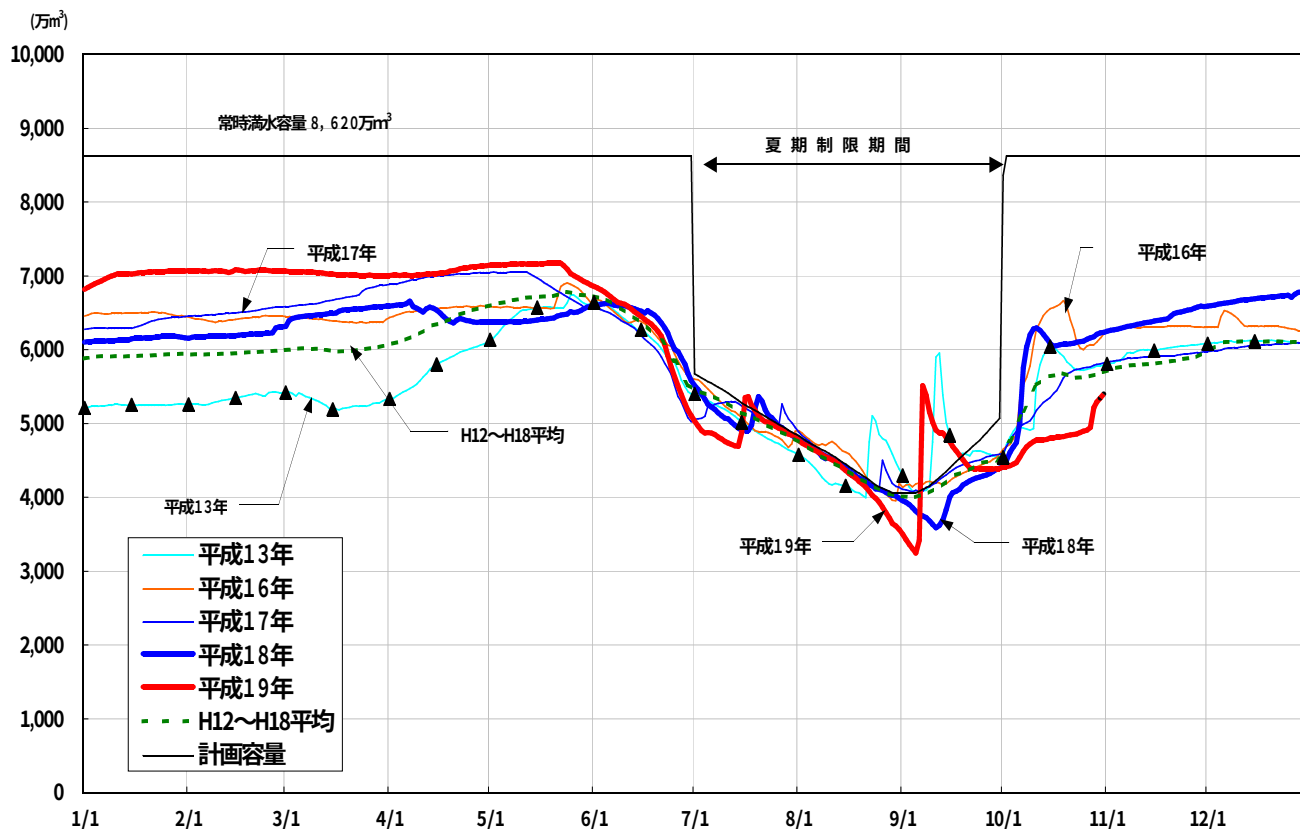
平成19年10月31日9時現在

ダム名	有効容量 (万 m^3)	貯水量 (万 m^3)	貯水率 (%)	前日補給量 (万 m^3 /日)
二瀬ダム	2,000	660	33	-32
荒川貯水池	1,020	1,025	100	0
浦山ダム	5,600	3,716	66	-22
3ダム合計	8,620	5,401	63	-54

1. 有効容量は、常時満水容量。
2. 貯水率は、常時満水容量に対する貯水量の割合。
3. 前日補給量とは、前日の貯水量と本日の貯水量の差。(プラスの場合はダムの集水区域からダムへ流入してくる水より、ダムから放流する量が多い)

図-6

荒川3ダム貯水容量図



4) 多摩川水系

(1) 降水量

平成19年の小河内ダム上流域平均降水量は、1月から6月の累加降水量は、465mm（平年比77%）となりました。

7月は台風4号と梅雨前線による降雨の影響により317mm（平年比148%）となり、8月は梅雨明け後の酷暑と少雨により69mm（平年比27%）となりました。

9月は台風9号の影響により667mm（平年比271%）と平年を大幅に上回りました。

10月は30日までに124mm（平年比73%）となっています。（図-7、表-7参照）

図-7

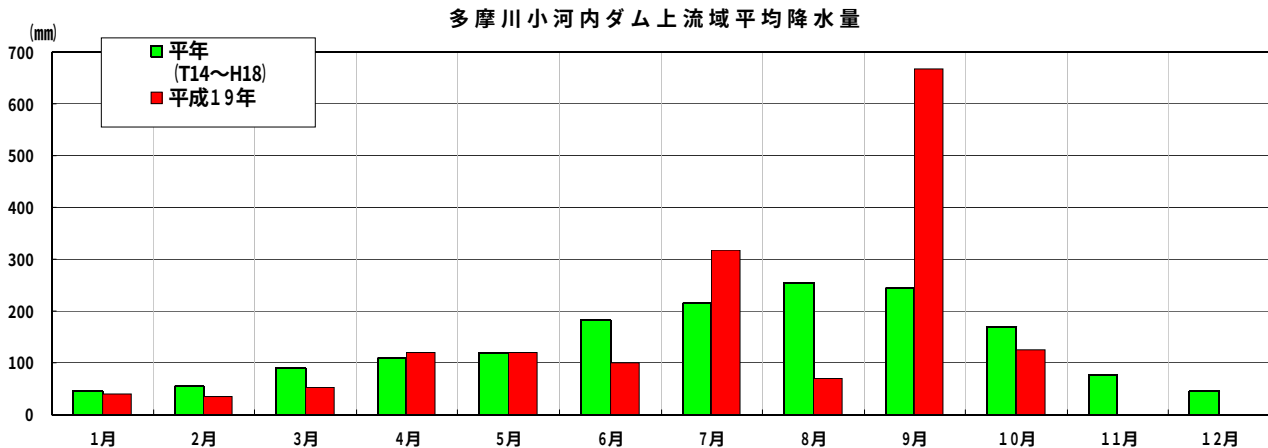


表-7 多摩川小河内ダム上流域降水量

単位(mm)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
平年(T14-H18)	45	56	91	109	121	182	214	255	246	171	78	44	1,612
平成19年	39	34	53	121	119	99	317	69	667	124			1,642
平年比(%)	87	61	58	111	98	54	148	27	271	73			102

※平成19年10月30日まで

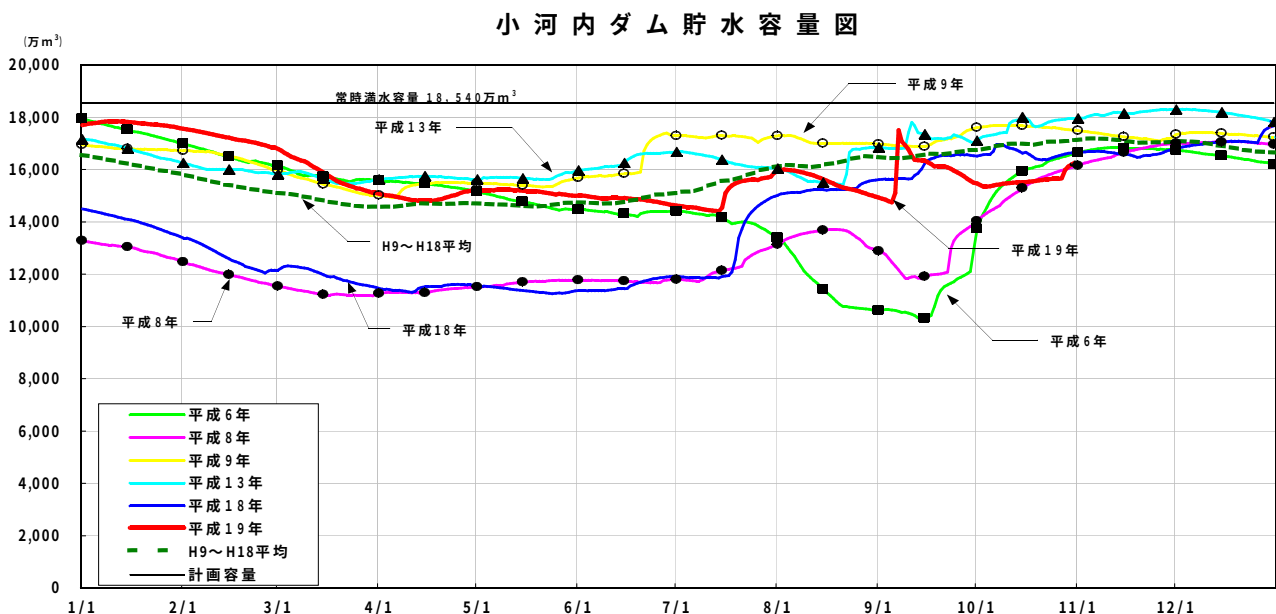
※.端数処理の関係で合計欄の数値が合わないことがあります。

※.小河内上流域面積 262km²

(2) 小河内ダムの貯水状況

10月31日7時現在の貯水量は、約1億6,267万m³、貯水率88%、平年比95%と平年をやや下回っています。（図-8参照）

図-8



2. 今年前半のダム群の運用を振り返って

1) 利根川上流8ダムの運用に関する分析と今後の取組

(1) 今年前半の利根川上流8ダムの運用について

今年前半の利根川上流8ダムの運用は、平成18年秋以降の大きな出水により、平成19年に入ってから平年を大きく上回る貯水量となっていました。

河川流況の低減に伴い1月中旬からダム補給を開始しましたが、平年でダムの貯水量が回復する融雪期に貯水量が回復せず、5月15日～6月10日迄は8ダム体制となった平成4年以降で最も低い貯水量となりました。これにより渇水を危ぶむ報道等も多くなされ、本会も分科会を2度開催しました。

5月下旬からは、週末になると降雨といった周期的な雨等により河川流況が比較的良好、除々にダムの貯水量も回復し、7月1日の夏期制限容量に対してほぼ満水の状態となり、7月は平年を大きく上回る降水量により平年を越える貯水量となりました。また、8月は酷暑と平野部での極端な少雨（東京では22日迄の累加降水量1mm）により急激に貯水量が低下しましたが、取水制限に至らずに済みまし

た。しかし、今年の初めの貯水量が平成8年と同じであれば、1月から9月まで連続して、取水制限といった厳しい状態が続いていた可能性もあります。

(図-9参照)

(2) 満水にならなかった要因

奥利根5ダムは、8ダム体制となった平成4年以降始めて春先に満水となりませんでした。これは1月から5月の少雨と暖冬・少雪による中標高部の積雪が少なかったため、比較的高部の低い位置にある藤原、相俣、菌原への融雪出水に伴うダム流入量が少なかったことが一要因となっています。

また、ダムの貯水量を維持していたのは、5月下旬からの周期的な降雨と高標高部の積雪深が平年並み又は平年を越えていたことによる融雪出水に伴うダム流入量が要因となっています。

(表-8、図-10参照)

図-9

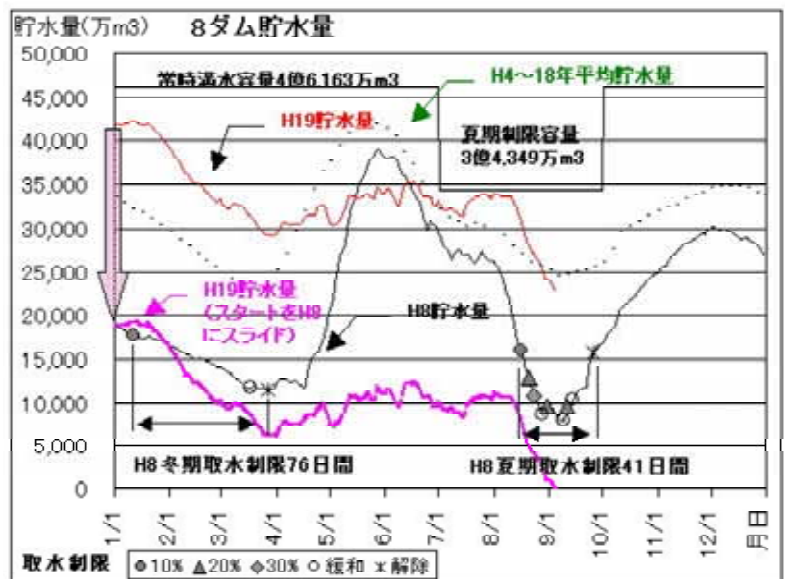
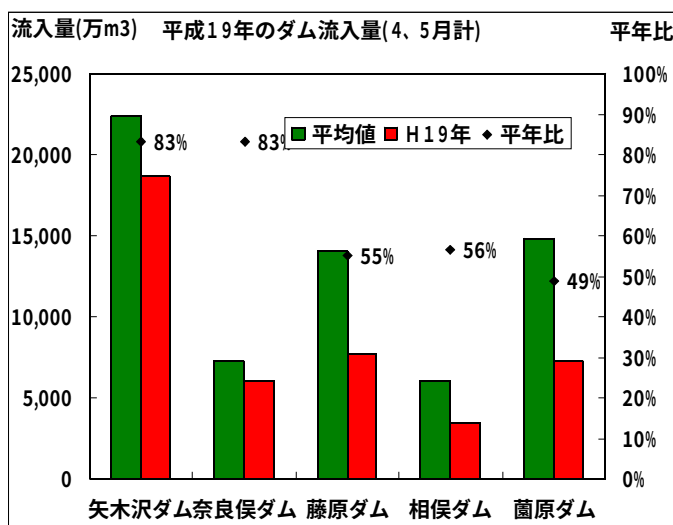


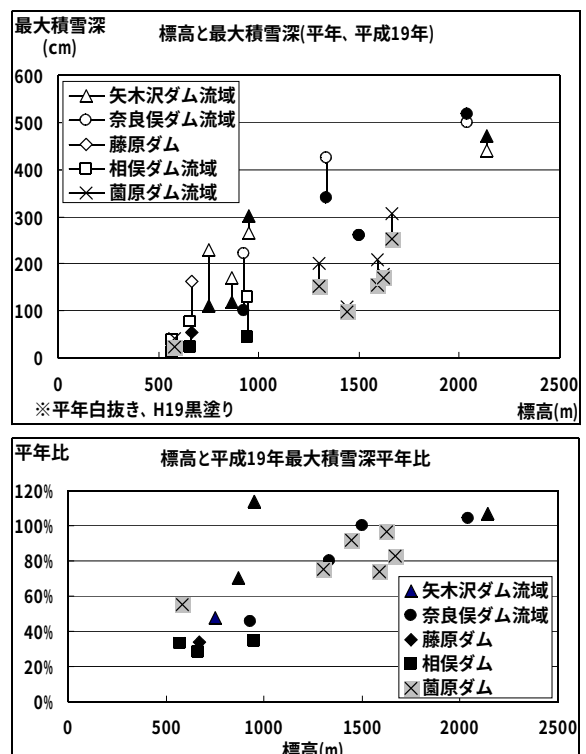
表-8



(3) 今後の取組

今後、リモートセンシング技術を活用し、積雪状況の観測体制を充実させるとともに、冬春季の水運用の予測精度の向上を図っていく予定です。

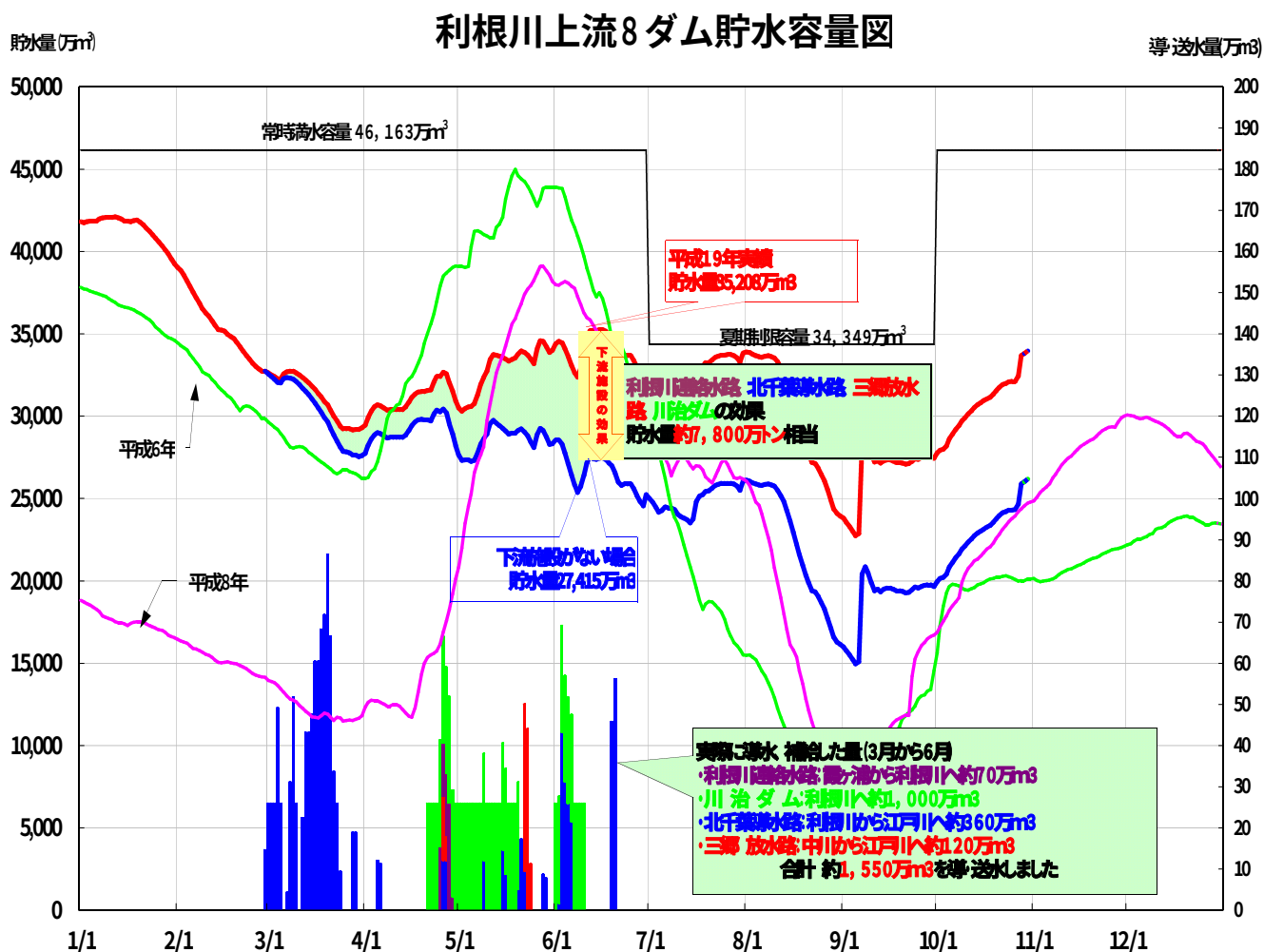
図-10



2) 下流施設等の運用効果（北千葉導水路、三郷放水路、利根川連絡水路、川治ダム）

利根川上流8ダムの貯水量は、少雨の影響を受け、1月中旬から補給となりました。また、少雪の影響で雪解け水も少ないと考えられたことから、3月から北千葉導水路（利根川から江戸川へ）を稼働させ、4月から6月は、北千葉導水路に加え、利根川連絡水路（霞ヶ浦から利根川へ）、三郷放水路（中川から江戸川へ）を稼働させ、導送水を行い、更に鬼怒川上流ダム群との連携運用により、利根川上流8ダムの貯水量の温存を図りました。3月から6月の下流施設の効果としては、奈良俣ダム1個相当の7,800万 m^3 を温存出来たと考えられます。（図－1.1参照）

図－1.1



3. 非洪水期における工事制限水位等について

工事主体	ダム名	工事名	工事概要等	工事期間											
				平成19年								平成20年			
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利根川上流ダム群	藤原ダム	藤原ダム法面対策工事	法面の崩落による影響を防ぐため法面対策工事を実施する。				7/20								3/30
		制限貯水位 EL.634.0m 制限期間 平成19年10月1日から平成20年1月31日		EL651.0m 31,010千m ³			EL639.0m 14,690千m ³			EL634.0m 9,260千m ³		EL651.0m 31,010千m ³		1/31	
	相俣ダム	クレストゲート塗装工事	経年劣化によるゲート本体への影響を回避するため塗装工事を実施する。						9/20						3/30
		制限貯水位 EL552.0m 制限期間 平成19年10月1日から平成20年1月15日		EL565.0m 20,000千m ³			EL553.0m 10,223千m ³			EL552.0 9,534千m ³		EL565.0m 20,000千m ³		1/15	
	下久保ダム	柏木地区損傷箇所の補修工事	台風9号の影響により、既設護岸が損傷を受けたため、その補修工事を実施する。												
		制限貯水位 EL284.0m 制限期間 平成19年10月1日から平成19年12月26日		EL296.8m 120,000千m ³			EL283.8m 85,000千m ³			EL284.0m 85,734千m ³		EL296.8m 120,000千m ³		12/26	
利根川上流	渡良瀬遊水池	干し上げ	水質環境改善のため、貯水池内の水位を低下させ干し上げを実施する。												
		*干し上げ期間は、昨年同様の約40日間を予定している。なお、詳細については、「渡良瀬貯水池水質改善検討委員会」において、検討する予定である。 制限貯水位 Y.P.+8.5m（最低水位） 制限期間 干し上げ期間：2月中旬～3月下旬程度					Y.P.+11.5mm					Y.P.+15.0mm		26,400千m ³	0千m ³

4. 今後の見通し及び対策

(1) 見通し

- ①. 平成19年10月26日発表の気象庁の1か月予報によると、10月27日から11月26日の関東甲信地方の降水量については、「平年並」か「多い」となっており、10月25日発表の気象庁の3か月予報によると、降水量は、11月は「多い」、12月は「平年並」、1月は「多い」となっています。また、9月25日発表の気象庁の寒候期予報によると、12月から2月の降水量は、「平年並」となっています。

1か月予報（平成19年10月26日発表）

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(>



3か月予報（平成19年10月25日発表）



寒候期予報（平成19年9月25日発表）

<冬(12月~2月)の気温、降水量の各階級の確率(>



- ②. 利根川上流8ダムのうち、藤原ダム、相俣ダム、下久保ダムは、ダム運用上、重要な工事を実施するため、貯水量を制限した運用を行っていますが、来年の融雪期前までには工事を完了させる予定です。渡良瀬貯水池については、平成9年から利根川の流況を見ながら実施している「干し上げ」を水質改善のために実施する予定です。

また、一般的に冬期の降水量が少なくなることから、下流域の水需要を満たすために例年12月よりダムに貯留した水を下流河川に補給するため、融雪の時期（3月下旬頃）まではダム貯水量の低下が予想されます。

(2) 対策

① [利根川水系における上流ダム群の貯水量の確保]

利根川・鬼怒川上流ダム群及び下流部の水資源開発施設においては、今後の降水状況及び下流部の水利用を踏まえたきめ細かい運用を行い、ダム貯水量の確保に極力努め、冬期及び来春の水需要に備えます。

② [利根川水系渇水対策連絡協議会の取り組み]

現在のダム等の供給能力は、首都圏の水需要の大きさに対して十分とはいえない状況にあります。利根川水系渇水対策連絡協議会としては、今後も水資源の有効利用に努めるとともに、取水制限等の渇水対策が必要になった場合には、機動的に対応していきます。